

French without Tears

— ラティガン最初の喜劇の成功に見られる要素 —

中村 愛人

(2002年9月30日受理)

French without Tears — T. Rattigan's First Comedy and Its Success

Yoshito Nakamura

French without Tears is the first play T. Rattigan wrote and published for himself after several studies and a collaboration. It seemed and still seems a simple unremarkable work, but its success was tremendous when staged. Hence our aim here to examine some factors in its success and in his future successes.

Key words: foreshadowing, plot, character, theme, reason, instinct

キーワード：伏線、構成、登場人物、テーマ、理性、本能

I. はじめに

French without Tears (1936) は、ラティガン (Terence Rattigan, 1911-77) が、幾つかの習作を経て共同執筆も経験した後に、単独で執筆し世に出した第一作となる。

この作品には、ほとんどはっきりとした筋立のようなものがない。バタバタとした騒ぎのうちに慌ただしく終わってしまう。一見登場人物も、はっきりとした性格を見せず、唯、数名の人物が集まっているだけのようである。そんな作品の印象がある。恐らくこのようなところが、初めなかなか認められず上演もされなかった原因ではないだろうか。

当時、21歳のラティガンは、未だ演劇の世界で独り立ちできないまま、両親の家に居候することを余儀なくされ、父親から2年の猶予をもらい、劇作に専念する。2年でもものにならなければ、諦めて父親の言う仕事につくことという約束であった。*French without Tears* を含めて、幾つかの作品を試みて失敗した後、結局期限も過ぎ、父親の紹介でシナリオライターの仕事を得る。ここでの脚色などの仕事を通して台詞のこつなども磨かれたようである。好都合なことに、ある劇場の上演に空きができ、何とか穴埋めをしなければいけないという状況になり、この作品 *French without*

Tears が、安上がりで上演できそうだとすることもあって選ばれた。ほんの6週間に限った興業であった。

準備がすぐに進められたが、色々問題もあった。作品の題名も、初めは *Gone Away* だったが、どちらかと言えば、それではハンティングを思わせるので適当ではない、と言う忠告を受けて考えたのが、この題名であった。それは、ある人気のあったフランス語の入門書の題名で、作品の内容にもふさわしいものになった。作品の結末にも問題があった。ダイアナが本性を暴かれて男たちから逃げられ、最後に希望を懸けるのが新しくやってくる生徒ヘイブルック卿なのだが、初めは、犬を連れたキザでお釜っばいブロンドの若者が登場することになっていた。ラティガンは、これではダイアナは確かに肝をつぶすだろうが、観客の後味が良くないと考えた。そこで工夫された代案が14,5歳の子供で、これなら意表もつくし趣味も悪くない、と決まった。

慌ただしく上演の直前とも言える変更を経て何とかその日を迎えるわけだが、結果は大方の予想に反して大成功だった。上演後の批評も一部を除いて、大絶賛であり、他の先輩劇作家を押さえて、30年代最高の喜劇とも評されている。評価の言葉を少し拾い上げると、“This brilliant little comedy” “a young author with the rare gift of lightness” “gay, witty, thoroughly

contemporary without being unpleasantly modern” “a touch of lovable truth behind all its satire” 等。このロンドンでの成功は、記録破りのロングランとなり、また、パリやニューヨークでの公演へと続くことになる。

実はこの作品はラティガンが執筆後何人ものその筋の人のところに送り、認められずまた送り返されて来た経緯がある。既に言及したように、一見して、誰が見ても余り大した特徴もない作品が、どうしてこの様に成功できたのか。これを解明することは至難の技に思われるが、これ以後、作家は、“a light comedy” だけでなく、次第に“a serious drama” と呼ぶべき作品群を生みだし、それらの作品を次々と成功させている¹⁾。

... Rattigan, after a period of uncertainty near the beginning of his career, very soon settled down into a reliable theatrical pro, progressing comfortably with each play he wrote, seldom writing a failure and never achieving a success which was not squarely based on craftsmanship, intelligence and extreme technical efficiency as well as the more elusive, arguable qualities of imagination and personal vision.²⁾

作家が、一旦軌道に乗るや、創作することによって着実に力をつけ、手法においても想像力においても確かな作品を生み出していったという。確かに、初期の作品は「発展途上」のものだったということにもなるが、ここで先ほどの疑問に帰って、後の作品を踏まえ、もう一度作品を振り返り分析し、そこにどのような要素、特徴、可能性が備わっているか等を見極め、できれば作品としての評価も試みてみたい。

II. 主題と構成

作品の舞台はフランスの海辺にある寄宿制のフランス語学校、と言っても、教師はマンゴー先生 (Monsieur Maingot) およそ60歳と、その25,6歳になる娘でやはりフランス語を教えているジャックリーヌ (Jacqueline Maingot) の二人。あとはメードのマリアンヌ (Marianne)。生徒は、ケネス (Kenneth Lake) 20歳位、ブライアン (Brian Curtis) 23,4歳、アラン (Hon. Alan Howard) およそ23歳、キット (Kit Neilan) 22歳位のほぼ同年代の若者4人と、一回り年上で35歳位の海軍少佐ロジャーズ (Lt. Cmdr. Rogers)。彼は前の晩に到着したばかりである。もう一人ケネスの姉で弟について来ているだけのダイアナ (Diana Lake)、やはり20歳位がいる。そして最後の

幕切れ寸前に登場して効果的な笑いを引き出すヘイブルック卿 (Lord Heybrook)、何と彼は15歳くらいの少年である。

生徒のうちケネス、キット、アランは外交官志望で、その試験を受けるためフランス語を習っている。但しアランは父親の考えで来ており、自身は小説家か何か他のものになりたいらしい。ブライアンは商売のため、ロジャーズは通訳の試験のためと言っている。

これらは、一つの狭い閉鎖的な空間においては中々多彩な登場人物が揃っていると言えるのではないだろうか。

第I幕は、7月1日、朝9時の居間。ケネスが勉強している所に次々と他の人物がやって来る。フランス語の勉強の話から始まり新入りのロジャーズの噂や朝食のことなど色々話すうちに、ここでの生活やそれぞれの人物そして人間関係などが明らかにされる。特に男女の関係で問題が起こりそうな状況が示される。

第II幕第1場は、既に2週間後、7月14日の午後2時頃の昼食後の居間。しばらくの談笑の後、マンゴー先生から祭りの催しに出掛ける提案がなされる。そこで誰が行くか、誰と誰がペアになって行くかと言う問題でゴタゴタが起こる。ロジャーズはダイアナに、キットにもう愛していないとはっきり言えと迫る。ダイアナはそんな残酷なことではできないと言葉を濁す。その後、アランの送り返された小説の話から殴り合いの喧嘩が始まるが、マンゴー先生の登場で授業に移る。2週間の時間の経過で、人間関係の、特に男女関係の変化がはっきり示されている。

第II幕第2場は、その日の午後6時頃の居間。祭りに出掛ける前の一時、ジャックリーヌとダイアナがキットとロジャーズについて腹を割って話す。続いてキットがダイアナにロジャーズと同じことを迫り、これまたダイアナは同じ反応を返す。その後キットとロジャーズの二人きりになり喧嘩になりそうになるが、話して行くうちに状況が理解でき、ダイアナに対決するというところで意気投合し、そこにアランも加わって飲みに出掛ける。

第III幕第1場は、2,3時間後の居間。先程一緒に飲みに出掛けた3人が話していて、そこにやって来たダイアナと共同戦線を張って対決する。キットとロジャーズのどちらかを愛しているのかと迫られたダイアナは、アランを愛していると答える。ショックを受けたアランは、二人にダイアナから守ってくれるように頼む。その後、アランはキットに自分の理想の女性像を語り、それに当てはまるのはジャックリーヌであり、彼女がキットに惚れていることを伝える。祭りに出掛けた連中が帰って来た後で、二人きりになったキットは

ジャックリーヌにキスをする。アランもダイアナと二人きりになって気持ちを打ち明けられ、思わず抱き締めて愛していると言ってしまふ。その場はブライアンが登場で終わり、ブライアンはアランに、ダイアナを誘ったがはねつけられたと話す。ヒントを得たアランは、ダイアナにそれを試すことで自分の運命を賭ける。結果は同じ。アランは外交官を諦めロンドンに帰って作家になることを決心する。

第III幕第2場は、翌朝の居間。マンゴー先生の二日酔いのためいつも以上にひどい授業の様子とその合間に伝えられるアランが外交官試験の受験をやめてイギリスに帰るとの話。アランはダイアナに迫られそうになるが、約束どおりロジャーズに助けられる。ジャックリーヌはキットと心を通わせようやく思いがかなう。アランを諦めヘイブルック卿に乗り換えようとしていたダイアナは、少年の彼を見たときアランと一緒にいくと宣言する。あわてるアランと周囲の笑いで幕。

この様に登場人物と作品の構成を見てみると、筋立てがほとんど無いと言うのは当てはまらないことがわかる。第I幕は、登場人物の紹介と人間関係やその生活ぶりを提示し、問題の所在をほのめかす。その中心はダイアナの男関係であり、現在はキットとイチャイチャしているが、ロジャーズの登場でどうなるかの心配。第II幕第1場では、祭りへの参加で人間関係が入り乱れる。ロジャーズがダイアナにキットにはっきり言えと迫る場面も興味深いし、アランの小説に関する話も、どことなく主題に関わるような重みを感じさせるものとなっている。第II幕第2場は、ダイアナとジャックリーヌの話で作品に重要な二人の女性の内面が明かされる。キットがダイアナにロジャーズと同じことを要求する場面も、第1場の同様の場面と合わせて見れば、より面白い。キットとロジャーズの対決と和解も笑いをベースに巧みに展開される。第III幕第1場は、意気投合した男3人の本音の話がいい。ダイアナとの対決を前にしての一時の静けさが、成り行きを見守らせる。ダイアナに愛していると言われたアランの狼狽ぶりも楽しめるし、彼の理想の女性像の話とジャックリーヌの思いをキットに伝える役割も彼らしい。そしてブライアンのヒントからの急展開。第III幕第2場は、相変わらずダイアナから逃げまくるアランが笑いを誘い、対照的にしっかりと落ち着くキットとジャックリーヌの出来立ての恋人たちが微笑ましい。そしてヘイブルック卿のどんでん返しは、さすが作家が変更しただけの効果を上げていて、ドタバタながら楽しい、如何にも喜劇らしい結末となっている。

更に、第II幕から第III幕第1場あたりまでの作品の主要部において、祭りの参加の話を中心として展開し、

人間関係、男女関係の縄目の切っ掛けともなり、また、作品の雰囲気盛り上げると共に、バラバラになりがちな喜劇的ドタバタをうまくまとめている、この祭りの効果は見逃せない。

作品の構成に関わっては、先ず伏線の効果を検討しよう。伏線的な台詞は、作品の随所、特に前半部に、巧妙に入れられている。

作品のヒロインとも言うべきダイアナであるが、アランの評価は手厳しく、平気でズケズケと悪口を言ったり皮肉を言う。新入りのロジャーズに、ブライアンと自分は、ダイアナの色香に対して免疫があると豪語し、

“I’m not implying it. I’m saying it. That girl is the fastest worker you’re ever likely to see. . . . Diana Lake, though a dear girl in many ways, is a little unreliable in her emotional life.”³⁾

とお節介にも警告する。また、当の本人にも、“You’d like anything that gave you a chance to come down to breakfast in a bathing dress.” (17) と皮肉を言ったりもする。しかし、ダイアナはそれに答えて、“Does it shock you, Allan?” (17) と聞き返す。このことから、彼女が、アランにとって自分の水着姿がどう見えたかを気にしているのがわかるだろう。他の男とイチャイチャしながらも、彼女にとってアランのことが常に頭にあることは、彼女の同様の言動から随所にほのめかされている。ジャックリーヌに、自分のことで喧嘩があったと聞いて、ダイアナは、“Yes. I hear Alan was in it. That’s very interesting.”(49) と、突然アランの名を出してジャックリーヌを驚かせている。この様なダイアナに気づいていれば、彼女が愛しているのはアランだと告白も、やはりそうだったかと、言わば安堵の気持ちで受け止められるし、アランもそれ程狼狽することもなかったであろう。

アランとローレイの歌も同じ効果を果たしているようだ。アランはローレイの歌を口ずさみながら、いい歌だと言い、“It’s a stupid fable anyway. I ask you, what sailor would be lured to his doom after he had been warned of his danger?” (26) とロジャーズに問いかけるが、ロジャーズは同意しない。ダイアナに翻弄される男たちが、そして後のアラン自身の有り様が重ね合わされ、免疫があると豪語していた彼の自信と合わせて、大いに笑いを誘うことになる。

また、キットとの話で、アランこそダイアナに惚れているのではないかとと言われて、アランは、“. . . I admit it’s quite possible I shall end by marrying her.” (38) と返す。後の展開を考慮に入れるなら、何とも皮肉で暗示的な言葉になっているのではないだろうか。

ジャックリーヌは、聡明で控えめで克己心のある女性。髪形をダイアナと同じにして密かにキットに気に入られようとするが、アランには見透かされ、実際にも効果は無い。これは伏線とまでは言えないかも知れないが、それなりに彼女のいじらしさ、一途さをそれとなく伝えるものとなっている。第II幕第2場の初め、彼女とダイアナが本心で語り合う場面では、女の魅力ではどうしてもかなわないとわかっているジャックリーヌは、“I only hope you make some awful blunder, so that he [Kit] finds out the game you're playing.” (48) と願いを口にすることしかできない。しかし、この願いは、やがて実現することになる。

この様に、作品の主に前半部に伏線的な台詞が配され、後の展開を必然的なものに思わせ、それが実現したときの満足感を高め、場合によっては、その時まで持続された緊張の弛緩によって笑いの場の醸成がより容易になされることもある。

作品の構成に関わって、マンゴー先生の働きも見逃せない要素であろう。彼は厳格なフランス語教師であり、予定をきちんとこなそうと心掛けている。彼の登場は何度かあるが、作品として非常にうまく設定されている。第I幕では、アランとブライアンが、新入りのロジャーズについて噂している途中で登場し、噂話を中断させ興味を膨らませる。第II幕第1場の登場は、アラン、キット、ロジャーズ、ブライアンの4人が殴り合いの喧嘩を始めた時、遮るように平然と授業を始める。第II幕第2場では、ダイアナを挟んでキットとロジャーズがあわや殴り合いになろうかという時、祭りに出掛ける衣装でさっそうと登場して注意を引く。二人の緊張は高まったままに置かれ、成り行きが更に注目されることになるが、一触即発の雰囲気での話し合いから、和解という意外な結末で驚かされる。第III幕第1場、アランの理想の女性像の話から、それがジャックリーヌであり、彼女が実はキットに惚れているのだと教えられた彼は、まさに意表を衝かれてにわかには信じられない状態のまま、ジャックリーヌとケネスを従えたマンゴー先生の登場となる。何も知らないジャックリーヌは、いつものようにキットと話すのが、当然ながら彼は落ち着けない。キットは二人きりになって思わずキスをしてしまう。これは、二人の関係の進展に欠かせない場面となっている。第III幕第2場のマンゴー先生は、二日酔いでいつも以上に厳しく授業をし、相変わらずの日常を強調し、一方で、出て行こうとしているアランを際立たせる。また、最後の場面では、注目の的であるヘイブルック卿をいかにも丁寧に招き入れることで、その人物が少年であったという予想との落差を大きくし、笑いを増幅する。

この様に見て来ると、マンゴー先生が、見事に場面の展開や発展に寄与している人物となっていることがわかる。

巧みな台詞を読み、聞く楽しみは戯曲には必須のものであろう。この作品でも、それは、例えば奇妙なフランス語で笑いを誘ったり、いかにもその人物らしい台詞、警句的な味のある台詞や気の利いたやり取りの応酬に加えて、暗示的な少しの台詞を読み込む楽しみなどがある。しかし、その詳しい考察は別の機会を待つことにする。

次に、作品に大きな意味を持つ登場人物を取り上げよう。作品の主人公は誰であろうか。既に、ヒロインとも呼ぶべき人物としてダイアナを挙げた。確かに彼女を巡って男たちは躍起となり、そして翻弄され続ける。まさに妖婦 (femme fatale) の面目躍如たるものがある。そして、感情のままに、本能の命じるままに男漁り続けるように見える彼女の、自分を偽らない考え方、生き方は、それなりの存在感を主張し、ヒロインの名にふさわしいように思われる。

彼女の生き方は、祭りに出掛ける前に交わされるジャックリーヌとの会話で明らかになる。キットにもう愛していないと言うのかと気にするジャックリーヌに対して、ダイアナは、キットもロジャーズも両方欲しいのだから言わないと答え、説明を続ける。

“Now I'm not nice. I'm not clever and I can't talk intelligently. There's only one thing I've got. . . I have got a sort of gift for making men fall in love with me. . . . you have been sent into the world with lots of gifts, and you make use of them. Well, what about me, with just my one gift? I must use that too, mustn't I? having men in love with me is my whole life.” (47-48)

ジャックリーヌは賢いし色々な才能がありそれを使っている。一方、自分には男たちを夢中にさせる才能しかない。だからそれを使って何が悪いのか。そうすることが自分の人生なのだ、と言い切る。自分では否定しているが、この娘は頭がいいのではないかと思わせる程、妙に説得力のある主張となっている。

この二人はキットを巡る恋敵であり作品において見事に対照をなす。

ジャックリーヌは、聡明で控えめでしかもきちんと仕事のこなせる女性、アランの言う理想の女性像である。

“First of all, she must not be a cow. . . . Secondly, she will be able to converse freely and intelligently with me on all subjects. . . . Thirdly, she will have all the masculine virtues and none of the feminine vices.

Fourthly, she will be physically unattractive enough to keep her faithful to me, and attractive enough to make me desire her. Fifthly, she will be in love with me.” (64)

身持ちが良く、知的で、男らしい美徳を備え女性的な悪徳はなく、他の男にちやほやされるほどの美人ではないが欲求を起こさせるに足る魅力を持ち、自分に惚れている女性。三番目の項目はいささか合点が行かないとしても、全体としては、それを聞いたキットの言うように、それ程大した条件ではない。最後の項目を除いて、あとは全てジャックリーヌに当てはまると言う。ダイアナを“unreliable”と評したアランの言葉を借りるなら、ジャックリーヌは“reliable”な女性ということができるのではない。

また、ジャックリーヌに特徴的なのは、感情を抑えることができる、克己心があるということであろう。キットを好きでありながら、もっともアランには気づかれていたらしいが、その気持ちを何か月もの間胸の奥に隠していたし、隠し続けようとして明るく振る舞っている。見方を変えれば、結果を恐れて現実に向かうのを怖がっているのかも知れない。結果など気にならないかのように感情のままに行動するダイアナと、自分を抑え、言わば、分別のある行動を見せる彼女の対比はいかにも際立っている。最後に、ジャックリーヌは、アランのおっせかいな計らいで、思いを遂げることができた。

対照的な女性二人に対して人数の多い男性の場合はどうであろうか。ダイアナを巡ってロジャーズと恋の鞘当てを繰り返すキットであるが、他の生徒仲間のケネスやブライアンと比べて残念ながら影が薄い。ブライアンは、他の者と違って外交官志望でもないし、自分なりの生き方が見られるように思われる。何よりも、町の女を買ってダイアナの魔力に抵抗できているという。それは、アランが彼の話にヒントを得て、彼女の魔力とは、ほんやりと見えるセックスへの期待ではないかと悟って、それを振り払うべく行動に移す重要な切っ掛けとなっている。

作品のヒロインをダイアナとするならヒーローはアランであろう。彼は作品の随所に顔を出し、男女を問わず多くの人物たちと接触を持って、彼自身を含めてそれぞれの人物の様々な面を見せてくれる。一応、外交官試験のためにフランス語の勉強に来ているのだが、実はそれは父親の意向で、彼は小説家を目差して作品を書いている。作品の途中で彼の小説の話が出る。戦争と良心的兵役忌避者、暴力と戦い、理性と本能、理想と現実などが書き込まれているらしい。彼は頭が良く、マンガー先生に電話に代わりに出てくれと頼

まれる位フランス語も優秀である。彼の話しぶりは気が利いていて、時として皮肉が交じり、また、逆説的な言葉も多く、作品の楽しめる台詞の大部分に関わっている。ダイアナに言わずと“a bit startling” (23)らしい。人間を見る目は確かで、ダイアナの正体を初めからの確に把握していたし、ジャックリーヌの気持ちも見抜いていた。

しかし、その彼にも実は弱みがあった。ダイアナには免疫を持っていると豪語し、実際そのように彼女に接していた彼だったが、一旦彼女から告白を受けると、たちまち様子が一変する。うろたえ逃げ惑う彼のあわて振りには、それまでの冷静でいくぶんニヒルな彼とは打って変わって正に喜劇のそれになっている。それだけダイアナの抗し難い魅力の危険性を理解していたということであろうが、それにしても、理想を掲げ、理性の優越性を主張する彼にしては、何という体たらくであろうか。ブライアンのヒントで何とか彼女から逃げ出す決心がついた後も、仲間を守られてどうにか自分が保てたというところであろう。

アランは性格的に、スマートさの中にも弱さを併せ持ち、一面的でない造形がなされているし、後半はヒロインのターゲットになるなど、最後まで作品の中心に位置している。また、本人たちではどうしようもなかったキットとジャックリーヌを結び付けるなど人物の間で立ち回ることも多い、言わば、狂言回しの役割もこなしている。作品の主題の表現に密接に関わり、同時に作品の展開に寄与する役割として、アランは興味深い主人公と言えるであろう。

アランの意外な脆さ、矛盾を孕んだ存在に対して、バランスをとっているのがロジャーズではないだろうか。彼は、初めのうちは、他の生徒に対して、いかにも海軍少佐らしく、直情的、好戦的、頑固な面を見せていたが、ダイアナのターゲットにされ、キットから彼女を奪った形になる。しかし、キットと対決し、キットの服装の滑稽さにも助けられて話し合う時、

“...I'm a perfectly rational being, and I'm prepared to discuss this particular situation rationally.” (53)と自分でも言い、キットに“Let reason have one last fling. If that fails we can give way to our animal passions.” (53)

と言われて殴り合いを思い止まるなど、彼自身理性を重んじる分別のある大人だということを示している。この後二人は意気投合し、アランも加わってダイアナに対して共同戦線を張ることになる。

ダイアナとの対決を前にして、彼は、アランに、外交官になるのなんかやめて作家になれ。可能性のことなど考えるなと忠告する。アランが思い切ってイギリ

スに帰ることを決心できたのは、年齢だけでない大人の人生の重みのある彼の忠告の助けもあったのではないだろうか。アランがダイアナに迫られてあわやという瞬間にも、彼は、“Is that the voice of reason, my dear fellow?” (76) と、アランの理性に訴え、体を張って助けてくれる。この様に理性の側に立ち、そうしきれないアランを助けるのも彼の果たす重要な役割と言えるであろう。

彼は、同様に人や状況を見る目がしっかりしている。ジャックリーヌについて、“That’s a charming girl, I think. Clever. Amusing. Pretty. She’ll make somebody a fine wife.” (41-42) と、彼女の良さを見抜いて最大級の賛辞を呈している。これは、アランの言葉によっても裏付けられている。また、ダイアナのことでキットと対決し、状況が正しく把握できたのも彼であった。“We’d better face it. Diana’s in love with neither of us, and she’s made a fool out of both of us.” (55) この状況ないし現実を直視する必要を説く彼の存在は、作家の後の作品のテーマと関連して、注目すべきだろう。

ロジャーズは、作品の前半ではキットからダイアナを奪う敵役的存在に見えたが、本当のところは、作品の良識を代表すると言っても良い人物で、20代前半の若者達の中で、理性を持った分別のある大人としてバランスを取り作品を支えている。作家が、一回り上の年齢の彼を配したのは、間違いなく成功だった。登場人物の中で、女性はダイアナとジャックリーヌ、男性はアランとロジャーズというそれぞれ対照的でありながら、ある面補い合っているペアーを組み合わせたのも、この作品の面白さでありまた深みともなっている。

作品の主なテーマとしては、a light comedy という性格からして、それ程明確なものは期待できないと考えられるが、アランの小説とこれまで考察した登場人物の関係から探れそうに思われる。第II幕第1場でアランの書いた小説の内容が話題になる。

二人の男がいる。戦争が始まり、彼らは良心的兵役忌避をしてアフリカに行く。一人は妻を連れて行ったが、もう一人の男がその妻に恋をする。そこで二人の男は戦う。しかし、この様に戦うことは、理性を使わず本能のままに行動することで、祖国で戦争をすることと同様悪いことだと気づく。だが、彼らはこの本能に負け、祖国に帰って戦う。彼らの理想は間違っていたが、彼らはそのとおりに生きられなかった。その時、彼らは妻をアフリカに残して祖国に帰った。二人は一度はその女を巡って戦ったが、その女こそ問題だと悟ったからである。

ダイアナを巡る男たちの争いと言う共通性はあるが、

ここでは別の見方をする。この中に二つの対立する価値観が提示されている。それは、reason と passions ないし animal instinct。後者は作品の別の箇所では、animal passions (53) とも言われている。小説は、この前者を後者に対して優先させるべきだと言っている。戦争は後者を優先させた結果と言えるだろう。また、後者が、容易には克服できないということも教えている。そしてその達成の容易ではない理想の意味を、アランは、次のように言う。

“In a hundred years’ time men may be able to live up to our ideals even if they can’t live up to their own.” (44)

登場人物の中で、初めから本音で生きている、感情のままに生きているのは、唯一ダイアナだけであろう。つまり、後者の価値観を代表するのがダイアナで、その他の人物は前者を代表しているということになる。結末の逃げるアランをそれでも追いかけようとするダイアナとキットへの思いのこなかったジャックリーヌを考えてみれば、作品の主張は明らかであろう。

それにしても、多勢に無勢の状況において、本能的、感情的生き方を貫こうとするダイアナの存在は不思議と魅力的に思われまいか。一方、男たちは弱体で、理性、理性と連呼しながら共同戦線を張ってようやく彼女に対抗できる、いやそれでもかなり危うい様子である。この理性側の脆さ危うさは、作品の喜劇性を高めるには効果的であろうが、主張もまた弱められてしまう。

作品の中にもヒトラーやナチスへの言及があるが、作品執筆は、戦争の暗雲の垂れこめる第二次世界大戦直前の時期であった。そういうことを考慮に入れるならば、理性による平和への切実な訴えを読み取ることもできる。もっと普遍的に、理性による本能の制御という理想を主張しているとも言える。Holly Hill が、ラティガン作品に共通して流れている主要なテーマとして挙げている“the mind-body dichotomy”という観点⁴⁾を重ねて考えることも可能であろう。理性・精神と感情・本能・肉体との対立であり、前者の優越性という理想の主張である。

アランの小説のように理想は容易には達成できない。本能側の力は並大抵ではない。作品の前半で、あれほど自信たっぷりの言動を見せていたアランが、ダイアナの告白を聞かされた後では、うろたえ逃げ惑い、仲間の助力を要請する。アランがそのような有り様では、形のうえでは明らかに理性側の勝利のはずなのに、印象は逆と言っても良いくらいである。喜劇なのだから、もっと単純な図式は描けなかったのであろうか。この疑問の解明は、簡単にできるはずもないが、執筆当時

の作家の内面からの説明が可能かも知れない。そして、この理想は飽くまで実現を前提としない憧れとしての理想ではなかっただろうか。

女性二人の確かな造形に比べて、男性側の旗色が悪い。それを補うかのように、共同戦線のような男性同士の親密な結び付きが顕著に見られる。アラン、キット、ロジャーズを初めとして、ケネスは、姉のダイアナが尊敬していると言う位アランを慕っている。後に発展可能なテーマの萌芽、あるいは隠されたテーマの一部現れかもしれない。

III. おわりに

French without Tears は、筋立ても余りはっきりせず、取り立てて特徴のない喜劇という印象は、実は、雑多な要素を詰め込み過ぎて、却って個々の特徴が目立たなくなっているというのが実際のところであり、将来発展可能な萌芽的テーマを含め、その要素において盛りだくさんな作品であった。そして、そのことは別にしても、このまま単独でも、大いに楽しめる作品であることは間違いない。また、作家の今後の展開、発展を期待させる作品でもある。

【注】

- 1) この様な作家の伝記的事実については、Michael Darlow & Gillian Hodson, *Terence Rattigan: The Man and His Work* (Quartet Books, London, 1979)
これを Michael Darlow が改訂した、Michael Darlow, *Terence Rattigan: The Man and His Work* (Quartet Books, London, 2000) Geoffrey Wansell, *Terence Rattigan* (St. Martin's Press, New York, 1997)
などを参考にしたが、何れにも大同小異の記述が見られる。
- 2) T. W. Craik (ed.), *The Revels History of Drama in English*, vol.7 (Methuen & Co Ltd, London, 1978) p.225.
- 3) Terence Rattigan, *The Collected Plays of Terence Rattigan*, vol.1 (Hamish Hamilton, London, 1960) p.14.
以後、作品からの引用はすべてこの版を使用。引用文の後の括弧に頁数のみ記す。
- 4) Michael Darlow & Gillian Hodson, p.60.